



趣味はあれこれ浅く広く！の私、子どものころから変わらない趣味というか好きなものが旅行である。小学校教師の父が夏休みと春休みに全国津々浦々、旅行に連れてくれた。それでもただの公務員なので、泊まる場所は共済会館とか公共の宿ばかり。結婚した夫も公務員で、国民休暇村や「かんぽの宿」が多く、ふつうのホテルに泊まったことがない。ACITAの旅行など、ここ15年くらいでようやくホテルに慣れたという田舎者です。

大学時代からは友だちと旅行するようになり、今のようにインターネットもないので、時刻表と旅行ガイドの本を手元において計画、旅行期間と同じくらいの時間と気力をつぎ込んだ。北海道12日間、四国や東北一周、山陰1週間など、リュック担いで周遊券使ってユースホステル泊まりという青春の旅。

旅行というのは3度楽しめる。計画を立てるとき、実際の旅行、帰ってから写真やしおりでアルバムを作ること。デジカメになって(ちなみにカメラも趣味。コンパクトデジカメから一眼レフまで次から次へ10台買った)撮りためた膨大な旅の写真も、今ではプリントすることもなく(終活の歳ですから)、インターネットでブログ公開するだけである。

旅に出て、その地の珍しい景観を眺め、歴史を知り、歩き回って写真を撮り、宿で上げ膳据え膳でくつろぐ。私はどちらかというところ歴史には興味なくて、写真を撮れる景観があるところが良い。歴史というのは解釈次第でどのようにも変貌するし、のちの人々の都合に合わせて説明することもできる。その点、山や海の自然は雄大で見たまんまだから。

景観といえば建築物も好きなので、白川郷や京都美山かやぶきの里、江戸時代の宿場町もけっこう訪れている。『宿場町旅情 写真紀行』に紹介の22宿のうち、私の訪れたのは9カ所しかない。これを読むと、似たり寄っ

たりの宿場町もそれぞれに特徴があり、その成り立ちや家の様式がわかる。地元の伝統的なお祭りや名物も豊富に載っている。

宿場町旅情の本、トップの宿場町は木曾の奈良井宿である。昔から名前は知っていたが、訪れたのはごく最近の2010年と15年。2回行ってもまた行きたいと思う旅愁情緒のあるところだ。奈良井宿は他と違って、通りに面する町並みに何となく迫力を感じていた。そのわけは、家々の2階部分が1階軒先よりも張り出している「出し梁造り」という構造になっているんだって。資料などもちゃんと読んだらもっと面白いんでしょね。

木曾の宿場の馬籠や妻籠も懐かしい。就職同期の友だちと、馬籠から妻籠まで峠越えの旧中山道を歩いた。45年前の馬籠峠はうっそうとした山中、馬籠宿もひっそりのどかなものだった。この友だちとは今も旅行仲間、ほんとに旅は道連れあってこそである。

三重県の関宿も詳しく載っている。町から遠く離れた場所に鉄道や国道が通ったため、東海道五十三次で唯一江戸時代のままの町並みが残された。昔からの「出格子」「虫籠窓」「幕板」「ばったり」や、漆喰壁の細工など見どころ満載。だいぶ前に行ったとき、興味深く見て撮ったので、とても印象に残っている。「関の山」という言い回しもこの地が発祥。

こういった歴史的保存地域は、映画のロケセットみたいにきれいに整備されて、観光で訪れる分には撮り甲斐もあるけれど、実際に生活している住民にとっては、住みづらいことが多いだろうなといつも思う。合掌造りなんて、あの雪深い地で、紙と木と萱の家はいかにも寒い。アルミサッシに断熱効果のオール電化の現代的家屋のほうがうんと暮らしやすいのに、自分たちの歴史ある地域を守るといふ誇りで維持されている。だから、散策するときは生活の邪魔にならぬよう静かに、そして、食事したりお土産を買ったりして地域に貢献しようと著者も書いている。

『宿場町旅情 写真紀行』

清永安雄 産業編集センター